日蓮大聖人御書全集

兵衛志殿御返事（ひょうえのさかんどののごへんじ）

（鎌足造仏の事）（かまたりぞうぶつのこと）

新版1483〜1484

兵衛志殿御返事（鎌足造仏の事）

建治3年（'77）8月21日　56歳　池上宗長

鵝目二貫文、武蔵房円日を使いにて、給び候い了わんぬ。

人王三十六代皇極天皇と申せし王は女人にておわしき。その時、入鹿臣と申す者あり。あまりのおごりのものぐるわしさに、王位をうばわんとふるまいしを、天皇・王子等、不思議とはおぼせしかども、いかにも力及ばざりしほどに、大兄王子・軽王子等なげかせ給いて、中臣鎌子と申せし臣に申しあわせさせ給いしかば、臣申さく「いかにも人力は

かなうべしとはみえ候わず」。馬子が例をひきて「教主釈尊の御力ならずば叶いがたし」と申せしかば、さらばとて、釈尊を造り奉っていのりしかば、入鹿ほどなく打たれにき。この中臣鎌子と申す人は、後には姓かえて藤原鎌足と申し、内大臣になり、大織冠と申す人、今の一の人の御先祖なり。この釈迦仏は、今、興福寺の本尊なり。

されば、王の王たるも釈迦仏、臣の臣たるも釈迦仏、神国の仏国となりしこと、えもんのたゆう殿の御文と引き合わせて心えさせ給え。今の代は他国にうばわれんとすること、

釈尊(しゃくそん)をいるかせ(怱)にする故(ゆえ)なり、神(かみ)の力(ちから)も及(およ)ぶべからずと申(もう)すはこれなり。

各々二人(おのおのふたり)は、すでにとこそ人(ひと)はみ(見)しかども、かくいみじくみ(見)えさせ給(たも)うは、ひとえに釈迦仏(しゃかぶつ)・法華経(ほけきょう)の御力(おんちから)なりとおぼ(思)すらん。またこれにもおもい(思)候(そうろう)。後生(ごしょう)のたのもし(頼)さ申(もう)すばかりなし。

これより後(のち)も、いかなることありとも、すこしもたゆむ(弛)ことなかれ。いよいよはりあげ(張上)てせむ(責)べし。たとい命(いのち)に及(およ)ぶとも、すこしもひるむ(怯)ことなかれ。あなかしこ、あなかしこ。

恐々謹言(きょうきょうきんげん)。

八月二十一日(はちがつにじゅういちにち)

兵衛志殿御返事(ひょうえのさかんどののごへんじ)

日蓮(にちれん)　花押(かおう)